

横須賀市かろうと山古墳

赤 星 直 忠

本古墳の存在は昭和二十五年に行われた横須賀市池田町大塚古墳発掘の際、見学に来ていた人から聞いて知った。地主の許と文化財保護委員会の手続を終え、恐らく遺物はもはや存在しないと思われたので、その構造を明かにする目的で発掘されたのは昭和二十七年十二月下旬。四日間を費し、横須賀考古学会によって行われた。過去に於けるらんぼうな発掘の残りものとして金銅弓はず、直刀断欠・鉄鏃断欠・金銅針金・鉄のみ等が検出された。

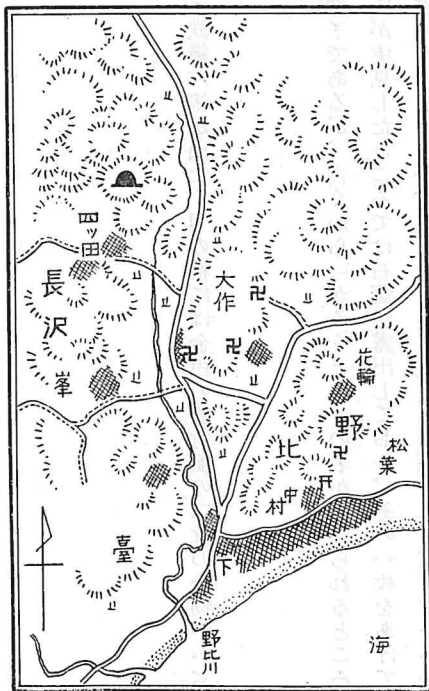
遺跡 かろうと山は横須賀市長沢字四つ田にある。三浦半島中央の主峯大楠山の東方に流れた尾根の一支尾根の先端である。南西部には長沢断層谷を距てて武山連丘が東北―西南にのびている。野比―岩戸道(通称あーだ路)に野比三叉路から約一キロの辺に北西に入りこんだ小谷がある。これが「四つ田」である。この谷奥に四つ田部落があり、その北側に背負っている丘が「かろうと山」で海拔九五メートル。山裾からの比高六五メートル。古墳はこの丘頂の東南端に下の部落に落ちこみそうな位置に構築されている。

調査前状況 一面の篠竹と雑木に覆われ、不明瞭な墳丘はこれが古墳であるかどうか殆ど気付かれない位であり、過去幾人かの盗掘のあとのみられる掘りあとが数カ所にみられ、中央部南寄に篠藪の中にたみ一枚余の広さに約一米の深さの大穴があった。大穴の周囲には石室の壁が露出していた。

既往の発掘 土地の古老の語るところ及各所から聞き知ったところによると、次の如く度々発掘が行われているようである。

1 称名寺老僧が人夫を伴い発掘したが金の茶釜がでないので中止した。

2 まんじゅう屋の老人が塚の上をふんで音がしたので掘った。刀が出た。



第一図 かろうと山付近図

たので又埋めた。

3 山田長吉という人が若い時数人で六―七尺掘ったが何も出なかった。

4 五十年ばかり以前に付近の藤里氏という老人が掘った。

5 昭和十年頃学生二人が来て掘った。

6 昭和十年頃藤原歌吉氏が石蓋をあげて少しかきまわしてみたら直刀片・鉄鏃片等が出た。刀の柄には金色の割竹風の二枚の金物がかぶせてあった。金色をした刀子さやもあった。

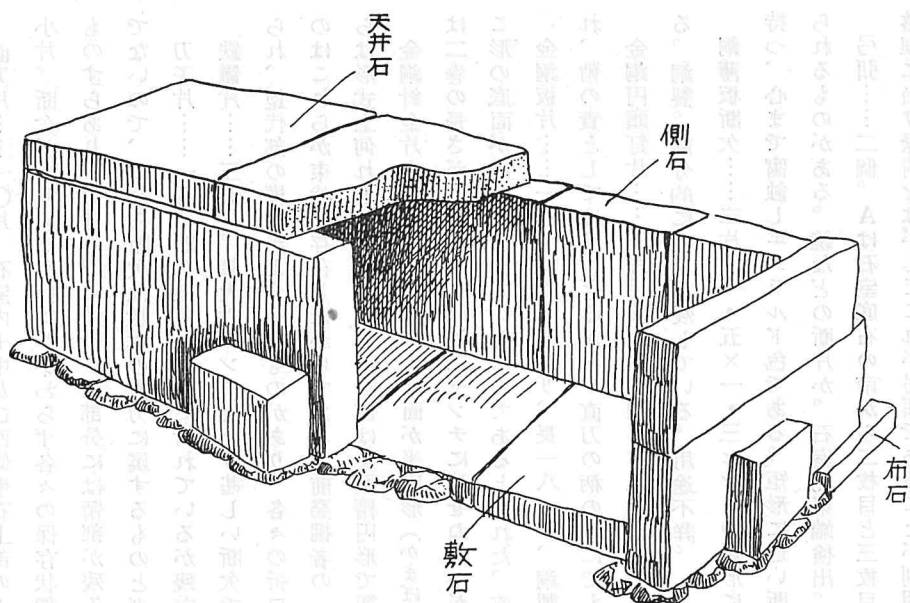
7 昭和十七―十八年頃左右田という人が人夫をつれて来て掘った。

以上七件が知られた。石室に掘りあてることの出来なかったものもあった様子であるが、古くから「かろうと山」の名が伝えられるところをみると、よほど以前に石室の存在が確かめられたものであろう。昭和十年頃藤原氏が実見したところでは石蓋が露出しており、その一枚をあげて入ったもので、その時とりだした遺物の大部分は戦災で焼失したといい、鉄製金銅弓はず断欠(刀子さやと称したもの)、鉄鏃片二、直刀片一が残っている。今回調査以前の状況は石室が全く露出し、天井石は全くなく、天井石であったと思われるものは碎かれて石室内に土といっしょに投げこまれていたから、この状態になったのは昭和十七、八年の左右田という人の発掘によるものと考えられ、恐らくこの時に内部が全く乱されたものであろう。

墳丘 丘の先端部に落ちかかろうとする位置にあり、従ってその南裾は丘の南斜面を覆う形となっている。北側はすそが切とられたような形になっているから、古くこの丘が開墾畑となったことでもあって、そのとき切とられたものであろう。北側から測ると墳丘の高さ八一センチ、西側で一二五センチ、東側で一〇センチとなる。大体一〇センチの墳丘とみてよい。墳丘の現在形は東西一二・五メートル、南北八・五メートルの楕円形に近いものである。恐らく原形は径二―三メートルの極めて低い円墳状であったと思われる。封土は地山の表土を若干けずりとした上に赤褐色粘質土を平に置きかためた上に石室を築き、赤褐色粘質土と黒色土と小岩塊(泥岩塊)の混じった土をかまわず盛り上げたもので、封土は赤褐色土と黒色土とが縞になり、その中に小岩塊を含んでいる。墳丘上には細い雑木が僅ある外は周囲一帯と共に篠竹が茂り、従って極めて判別しにくい状況である。

石室 墳丘中央に南北(南微東)を主軸として存し、残存蓋石上の封土厚は六六センチである。凝灰岩大切石の矩形板状のものを組合せ、矩形平面の箱形に構築されたもので、底及び天井も同様な矩形板状の大切石が使われている。即ち内法幅北端九五・五センチ、南側九〇センチ、長西側二五センチ、東側二五・五センチ、高七二センチの竪穴式石室である。石は四枚の矩形板状の切石をならべたものを底面とし、西側壁は二





第二図 かろうと山古墳石室構造

枚の矩板形状の大切石を垂直にならべ、東側壁は四枚の矩板状切石を立てならべ、南壁及び北壁は横に長い板状切石各二枚を横積にしたものである、西側壁面の下端は底石の端に内面の端をのせ、大部分は割石を並べたものを基礎として立ち、外側には短柱状切石を横たえたものをよせか

けて外面へ倒れることを防いでおり、北壁の切石は下端を底石の端にのせておらず、下面に柱状切石を横たえたもの及び割石を基礎として側壁の端によせかけ、且外側に短柱状切石を横たえたものをよせかけて外面へ倒れることを防いでいる。この構造は西側及び北側において明にされたものであるが、東側及び南側でも同様な構造にあるものと思われる。天井石は全部割りとりられたため残存しないが側石上の僅な残存部分によって、他と同様な板状大切石を三枚用いたものと推察された。

石室を構成するに用いられた板石は三浦半島の基盤を構成する凝灰岩中、逗子層に属するものと認められ、この岩はあまり遠くない石切場から切りとられ、水磨きされたものが運ばれたものであるが、使用石中の最大のもは天井中央石の長一四〇八センチ、幅一一六センチ、厚二五センチのものであり、次は西壁北側の長一四〇・五センチ、幅七二センチ、厚二三センチのものである。石室全体では一七枚の板石を担ってこの山頂に運んだものであり、その労力は大変なものだと考える。調査中石室内の土から青粘土の掌大のものが検出されたのは天井石のすき間乃至石室上面が粘土で覆われていたことを物語るものではあるまいか。

遺物 古くから幾度にも発掘された石室であるから遺物の残存は全く期待出来なかったにもかかわらず、石室内の土を運び出したとき、その土に混じて直刀片・刀子片・鉄鍔片・柄巻の金銅針金片・銅細板片・円頭釘片等が僅かではあるが検出され、底石の落込み部と底石と底石とのすき間とから各一個の弓弦が破損してはいるが充分原形のわかる程度に採集され、同じく底石のすき間に落込んだ鉄製品が細片となって石から剥ぎとられた(後これは鉄製のみとして復原された)のは望外の収穫である。以下各遺物について説明する。

直刀片……一〇片。石室内土中及び西側壁石上部の土中に混在。長一〇センチの断欠が最大。八―五センチ程度のもの六片、三片はそれ以下の小片。断欠が余りに細かいにかかわらず各々の保存状態は比較的良好で、刀身の如き、内部まで酸化してはいるが、ふくれ上らず殆ど旧状に近いものすらあり、刀身の周に錆ついた部分には鞘部が残るものさえあり、鞘が漆塗のものであった様子が充分うかがわれるものがある。身幅が一樣でないのも、これら断欠は数本の直刀に属するものと考えられる。鞘の部分に布片の錆付いたものもみられる。

刀子片……一片。断欠は更に二つに折れているが残存全長四センチ。茎部だけであるが柄の木質部がよく残っている。

鉄鍔片……三五片。最大六センチという甚しい断欠であるが保存状態は比較的良好、この様に折られる以前には充分原形をとどめていたものが多い。これらが束状に存在したからである。前発掘者の一人、藤原氏に聞くと確に十数本が束になってくっついたままのをとり出したという。これは形式上何れも尖根式に属し、頭部は尖頭楕円形で頸のない様式が多かったらしい。頭部の残存するもの四例が何れも同様式である。

金銅針金片……一二片。何れも断面が半円形(かまぼこ形)、鍍金銅針金。寸断状態で土中に混在したから検出が極めて困難であった。長いものは二巻の長さがあるが短いのは二センチに達せぬものがある。二巻の状態で出たものによって原形が楕円状に巻かれていたことがわかり、かまぼこ形の底面が内側になっていたものであると知れた。直刀の柄巻の針金である。

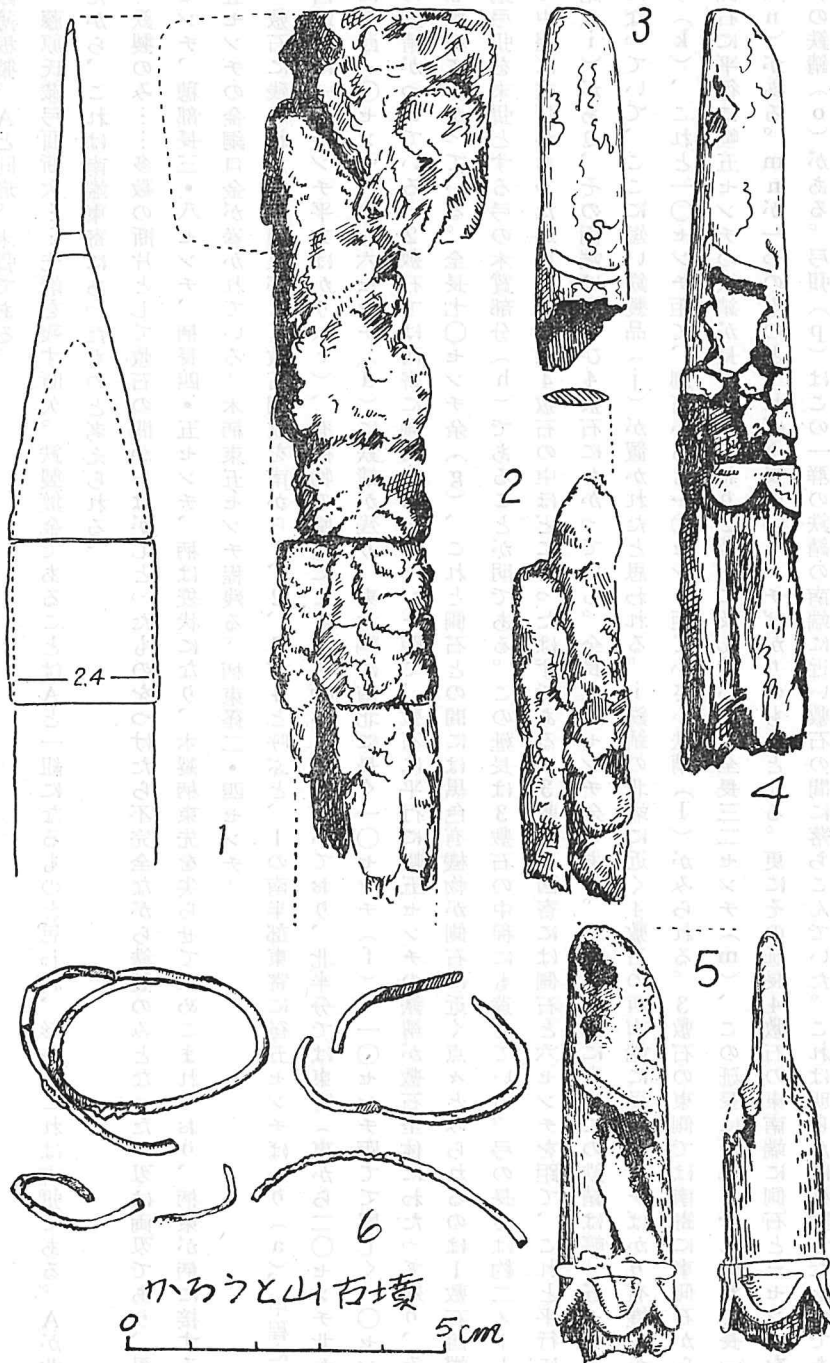
金銅板片……一片。幅六・五ミリ、長一八ミリ、銅製鍍金、断面はゆるい弧状、全体も亦弧状である。原形は楕円形の輪形であったと考えられ、鞘の責としては薄すぎるから、直刀の柄の端にでもはめられた金具であろう。

金銅円頭釘片……三片。残存長二四ミリ(径二ミリ)、一四ミリ(径二ミリ)、九ミリ(径一・五ミリ)の三例。何れも円い断面で片方に円頭がある。銅製。部分的に金色を残している。用途不詳。

銅薄板断欠……二片。一・五×一・三センチの矩形に近いものと底辺一センチ他の二辺各一・五センチの三角形のもの。厚一ミリ強。幾分反を持つ、心まで腐蝕しエメラルド色である。矩形に近い断片は無文だが三角形の方は反の内側面に低く細い隆線が数本みられ何か文様の一部分とみられるものがある。鏡などの断片か。石室北東端検出。

弓弭……二個。Aは石室底石の南から二枚目と三枚目の間、東隅に落ち込んでいたもので土と緑錆とに包まれた短棒状品として検出された。遺物整理に当り緑錆をはがしてこれが弓弭であることが判明した。内部に木質を残す。全長六・三センチ、弓弭部とその基部に付加された四枚の花弁状飾部とからなる。弓弭部は鉄製、鍍金、長五・二センチ、飾部は銀薄板製で周を隆線縁としたりしたように押出したもの。銀薄板押出花形飾付鍍金鉄製耳弭である。片面はひどく破損している。その形からこれは本弭である。Bは南端の底石の東端が側石からはずれ、西側石の重みで西に

ひどく傾斜したため、南から二枚目の石との間に一〇センチ以上の差が出来、石室西南隅に落込部を作っていた。この部分に側石に殆ど接する所に側石と平行に、緑錆と土に包まれた短棒状のものとして検出され、充分注意して周囲の土を除きこの短棒状に更に一二三センチの木質棒状部分の付加することをみとめ、これが弓の一部分であることが認められた。この弓弭は銅薄板鍍金製であるが極めて薄いため緑錆とりのぞき中大破した。全長七・八センチ。弓弭部とその基部に付加された四枚の花弁形飾部とからなる。弓弭部鍍金は白味を帯びたものであり、花弁形飾部は



第三図 かるうと山古墳遺物

1. のみ 2. 鉄鏃 3.4.5. 弓はず 6. 金銅はりがね

銀薄板製。Aと同形。末弭である。

藤原氏藏弓弭断欠……先端を残す断欠。鉄製鍍金であることはAと一組になるものと思われ、形からこれは末弭である。Aが北方東寄部にあったから、これは南端東寄にあったものと考えられる。

鉄製のみ……多数の断片として敷石の間からはがしとったものをつけたら不完全ながら鉄製のみとなった。又は両刃であり、又先復原幅五・三センチ、穂部長三・八センチ、柄長四・五センチ、柄は袋状になり、木製柄東先を尖らせてはめこまれており、柄東が柄に接する部分には幅二・五センチの金銅口金が巻かれている。木柄東五センチ程残る。柄東径二・四センチ。

敷石に残された遺物の痕跡……敷石四枚を南から1、2、3、4と呼ぶと、1の南半部東寄に径五センチばかり(a)、中程にも同じ位(b)、西端隅に一五センチ平方ばかり(c)、有機物の腐朽による黒色物がこびりついており、北半分では東寄(東から二〇センチ北から二五センチ)に東西一〇センチ、南北六センチ(d)に鉄錆が残り、東北隅に南北に長く一〇センチ(f)、一〇センチ距てて同じく一〇センチばかり(e)の鉄錆がついている、2敷石では西寄に側石から一〇センチ距て、敷石に平行に幅五センチの鉄錆が敷石全体にわたって残り、その両端は1及び3敷石にかかっている。全長七〇センチ余(g)、これと側石との間には黒色有機物が側石に近く点々とみられるのは1敷石西端に検出された金銅弓弭を末弭とする弓の木質部分(h)であることが明である。この延長は3敷石の中程にも達している。弓の長さは約二メートルだから1敷石の中程に末弭があったから、本弭は4敷石の中ほどにあったはずである。3敷石の西寄には側石と六センチを距て、これと平行に幅五センチの鉄錆(i)があり、その両端は2及び4敷石にかかっている。全長七〇センチ余である。この北端部に近くこの鉄錆は幅一五センチ、長一五センチになっていて、ここに短い鉄製品(j)が置かれたと思われる。i鉄錆の北端に近く4敷石の西南端に径六センチばかり有機物がこびりついており(k)、これと一〇センチ距て、側石からも一〇センチ距て小さい鉄錆(l)がみられる。3敷石の東側では南寄に東側石から六センチ距て、側石に平行に幅五センチの鉄錆が長くついており2敷石に及んでいる。全長三二センチ(m)、この延長にこれと少し離れて長一七センチの鉄錆(n)がある。mnが一つのものとするれば全長五〇センチばかりのものとなる。更にその延長4敷石の東南端に側石と三センチを距て長二〇センチの鉄錆(o)がある。弓弭(p)はこの一群の鉄錆の南端に近い敷石の間に落ちこんでいた。これは明らかに移動したものであるが、東側にも一張の弓があったことが考えられる。4敷石の北半には何も痕跡がない。

地主が見たという土器片……地主山田伊勢松氏が十年ばかり以前に山掃除をしたとき、墳丘に灰色をした茶碗の半欠のようなものが落ちていたという。これは須恵器杯の断欠ではなかったらうか。

考察 (4)墳丘……三浦半島の古墳分布はまだ充分調査が出来上っていない。盛土の塚と同時期の墳墓で別の形をとった横穴についてはその分布

が殆ど調査済である。横穴にも盛土の塚（古墳）にも新古が当然ある。横穴は口さえ開いていればのぞいてみただけで大略の想像はつく。然るに盛土の塚である古墳は大部分が実際に掘って内容物をみないと大体の古ささえわからないのである。横穴は口が開かれても多くはそのまま残っているが、古墳は開墾されて畑になる場合が多いので、次第になくなってしまった。そんなわけで塚と呼ばれるものでさえ、まだ充分分布がわからないのに新古までは更にわからぬというのが実際である。そんなわけだから古墳内部の様子が知られることは極めて大事なことである。かろうと山古墳が恐らくその附近にあったと考えられる上代村落を一目で見下すことのできる丘の端にあって、その裾の一部が丘の端から山腹にかかっているような位置が選ばれたということは、墳丘それ自体の高さが一メートル足らずの目立たない低いものであることと共に考えさせられる問題である。古墳それ自体は低く目立たないが、古墳のある丘自体は村落から極めて目立ってみられる丘で、しかもその丘の形そのものが極めて大きい円墳形であるということは、その丘全体を古墳と同じに見させ、考えさせる上に都合よいことである。かろうと山がこの条件に極めてよく合ったものであることと、直径十二メートル余、高一メートルたらずの低い墳丘というみすぼらしさにくらべて、その石室の立派なことはこの墳墓の古さを示す鍵であらう。

(四)石室……三浦半島の古墳中、石室のあることが明らかなのは三浦市初声町三戸の二基（一は露出、一は地主談）と南下浦町金田の某塚（鈴木保和氏談）と、このかろうと山古墳とである。何れも詳細不明だが、かろうと山古墳のとは全然ちがっているらしい。かろうと山古墳では凝灰岩切石を水磨きした大板石を組合せたもので、きちんとした矩形の平面を持ち、底にも天井にも切石が使われている。このような美事な石室が構築されるには相当技術的なものを必要とし、これが此処に築かれたということはそれだけの技術が既にこの地で行われたことを知らせるものである。普通このような切石の石室は横穴式に造られるのに、ここでは縦穴式である点に古さと、中央との時間のずれとが考えられる。本墳石室の大きさは南と北、東と西とで幾らか長さの違があるが、水磨き切石を組合せたこの様な立派なものであるからきつと何かの規準があつて計画されたものと思う。大体長さが幅の三倍に近い。これらの幅及長さを古代の尺度に換算してみると唐尺の三尺〓八九・一センチとなつて本墳の幅九〇センチと略一致する。唐尺の九尺〓二六七・三センチは本室長の二五三・五センチに大体似たものである。本墳は度々の地震で石がずれていることは底石の端にのっている管の側石がはずれていたり、石と石との間隔が不同であつたり、若干傾斜したりしていることでもわかる。西側壁の上面だけみても南端は北端より一三センチも沈下している。決して築造当初のままでない。大体唐尺の長九尺幅三尺に作られたものだったと考えてよからう。もしそのような規準が行われたとすれば、考えられるのが孝徳天皇大化二年の薄葬令である。王以上長九尺幅五尺の玄室が規定され、上臣下臣はこれに準じ、大仁小仁大智小智等は特に規定がない。これだけの立派な墳を作り得た者は恐らく三浦半島での最高権力者だった筈である。誰であつたか全くわからぬが都の墓制に準じたいところがかがわれる。

(c) 遺物……幾度にも発掘されているので、どんな品がどの位置に副葬されたか全く不明である。人骨も全く残らない。然るに幸なことに底部の敷石に鉄製品の鏝が附着している。腐朽有機物が黒くこびりついている。これらによって石室の東西両側に金属製品がおかれ、南側に腐朽し去った有機物質製品が置かれ、北側の何も痕跡を残さぬ部分に土器類が副葬されていたろうと推察出来る。これを今回検出遺物の位置と対比して副葬品の原位置を復原考察してみよう。西端には明らかに金銅弓弮をつけた弓が一張置かれた。東端にも明らかに鉄製鍍金弓弮をつけた弓が一張おかれた。箭はゆき(えびら)にさされて副葬された筈である。発見された時、鉄鍍が束になって鏝ついていた筈である。今回調査中鉄鍍断欠は第一敷石の北寄の東及び西部分と、第三敷石の東及び西部分と第四敷石南寄の東西両部分に検出されている。これらの鍍片分散状況からみると第一敷石の北寄の東及び西側と第三及び第四敷石の合せ目付近の東及び西側とに限られるようである。然らば弓の元及び末に各一腰ずつの箭が置かれたと考えてよいのではあるまいか。即ち f、q、j、o の鉄鏝部分がその痕跡と考えてよいのであろう。藤原氏が石室の南蓋をあげて鉄鍍束を取り出しているのもこれを裏書する。第二敷石西端の長い鏝(g)、第三敷石西端の長い鏝(i)、東端の長い鏝(m及びn)は夫々直刀A、B、Cの副葬位置と考えて誤あるまい。第二敷石の南寄の東及び西端にのみ金銅針金片が検出されたことは直刀推定位置からすれば直刀B及びCの柄部分に当るから、この両直刀が同じように金銅針金を柄に巻いた様式だったと推定して誤ないものと考ええる。藤原氏が石室の石蓋を開いて入ったのは南端らしいから、氏が取出したという割竹状の二個の金銅板を柄とした直刀というのは第二敷石の西端に鏝をとどめた直刀Aに一致するようである。刀子断欠中莖が一個あるが西壁石の上部にすてられていた直刀片や鉄鍍片の中にあつたのだから原位置は不明。第一敷石の東端(北寄)におちこんでいた刀子(e)が一個だけ位置が明らかである。これは東側弓の末はずに近いところにあつたことが確である。第一敷石の南端にa、b、c三カ所に有機物質が濃く残っており、その東端に金銅円頭釘断欠の一個が出ていることから、この釘がこの有機物に打ちつけられていたものと考え、且て吉井城山横穴出土の円頭釘が花座板を伴うことから又其の長さから、これを楯に打たれた釘と推定したことがある(註1)。本品も楯に打たれた釘であろうと推察すれば、前述有機物質群が楯の板であつたことになる。復原された鉄製のものは第二敷石の東端に落ちこんだもので、これによって本墳には武器の外に工具をも副葬したことが明になった。のみの出土例は全国的に少いので、本品は工具としての「のみ」の一例を加えたことになる。従来穂幅の狭いものが知られていたが、本品は穂幅の広い即ち双先幅の広い例として、しかも両刃のみの例として特記することが出来る。第四敷石の北端に何も遺物が検出されなかつたことと、この辺に何も鏝がついていないこと及び地主が塚上にて須恵器坏半欠らしいものが捨てられていたのを見たということから、この部分に土器が置かれたと推察したい。かく副葬遺物の位置を推察してみると、直刀柄の方向、弓はず位置などからこの石室中央に埋葬された本墳の主は南方に頭をむけていたものだったろうと推定することができる。頭を南方にすることは従来発見された三浦半島の古墳時代後期に属する横穴内遺骨の方向と一致するものである。

(イ)年代……水磨きの切石組合せ石室は聖徳太子墓を以て最初とされている。本墳石室はそれは形態は違うが水磨き切石組合せによって構成されている。明らかに太子墓以後であることに問題はない。群馬県下の調査では薬師塚古墳及び宝塔山古墳(註2)が何れも切石組合せによる横穴式石室を持っており、出土品から奈良時代初期と推定されている。然るに本墳と同じような構造の切石組合せ石室が県下茅が崎市甘沼横穴群中の一穴から出土したことがある(註3)。この横穴の形式は、奥壁が平でアーチ形をなし、断面もアーチ形で、入口に近づくにつれて高さと幅とを減ずるものであり、奥壁に接して高い棺座が設けられたり、この棺座上をほりくぼめて造付石棺にしたものなどのある様式である。この様式の横穴は横穴中でも末期に属するもので「末期横穴」の名で呼ばれるものである。大磯町のこゆるぎ山塊南面に三〇〇近い横穴があるが大部分がこれであり、三浦半島では谷奥にまで分布し、二〇穴三〇穴と群集する横穴群の大部分がこれである。然しこれらの横穴からは従来目立った出土品が知られておらず、より古い形式の横穴との年代比較さえ充分出来ないものであるが、これら横穴出土土器中に目立つ特長は須恵器の底に高台があること(註4)で、これら須恵器は奈良時代寺跡から出土する須恵器とも類似するものである。このことはこれら横穴の年代推定に重要なことである。更にこれら横穴中から火葬骨を出した例が三浦半島各所にある(註5)。このことは火葬が相当三浦半島に行われるようになった時期のものであることを物語るものである。このような年代推定の行われている前述横穴内から出た切石組合せ石室と類似の切石組合せ石室の年代は恐らくこれに近いものと考えられる。本墳石室の大きさが大化墓制に似たところのあるを感ずることなどにも大化墓制の影響が考えられ、少くとも大化以後のものである。石室が地下にほりこんで作られ、上に低く目立たぬ封土を作っていることは大磯町釜口古墳(註6)と似たものである。

遺物は完形品が殆どないので充分年代判定の材料にならぬが半月形断面の金銅針金を柄巻にした直刀があったことがわかつている。千葉県金鈴塚古墳出土の直刀には環頭太刀に刻目のある銀線で柄を巻いた四例があり、頭椎太刀に断面三角形の刻のない金線を巻いた一例がある。これは頭椎太刀としては極めて珍しい例となっている。本例は刻目のない半月形断面の金銅線であることが違っているが何か時代的に近似があるようである。本墳からは三例の弓はずが知られ、金銅製と鍍金鉄製とがある。形式は同じである。共に木部に接する方に銀薄板製の押出四花形飾がつけられている。前述千葉県金鈴塚遺物中に銀薄板製弓はず七例が知られ、元はず末端の切口が相対する二枚の花弁形になっている。本墳のものは周が押出になった四弁である点が違っているが共に花弁形である点に共通のものがある。本墳遺物は金鈴塚に比べるとあまりに少いけれども優れた点では似かよった点がある。金鈴塚は奈良時代若しくはその直前のものと比定されている。

本墳の年代については以上の如く大化以後のものである点は既に明らかであるが、尙遺物の上からも、切石組合せ石室が奈良時代中乃至後期に比定される横穴出土の石棺と似た点があることから、主体部が地下にあり、封土が低く目立たぬという末期古墳の特長を持つものであることから、古墳末期の様相が多分にみられる。然るに其の石室構造は竪穴式であり、当然薄葬令以後のものと考えられるにもかかわらず、尙比較的豊富

な遺物が副葬されたようである。これは古い伝統を多分に持つものと考えられ、保守的な地方の様相を示すものということができるから、本墳を古墳末期のものと推定し、既に奈良時代に入っている頃のものと考えたい。

結 円墳状の大きい自然丘の頂に極めて目立たぬ墳丘を営む「かろうと山古墳」は地下に立派な切石組合せの竪穴式石室を持ち、意外に豊富な且つ優れた遺物を持っていたようである。既に度々盗掘されたので詳細には知られなかったけれども、銀薄板製押出四花形飾のある金銅弓はずにしても、直刀の柄卷になっていた半月形断面の金銅針金にしても鉄製のみにしても本県下で知られた最初の遺物として特記されるものであるし、切石組合せの竪穴式石室にしても本県下で知られた石室中での優秀なものである。その様式と遺物からその年代を古墳末期のものとし、既に奈良時代に入っている頃のものとして推定した。かくの如き遺物を持つ石室を営み得た古墳の主は恐らく三浦半島有数の豪族であったに違いない。古東海道が三浦半島を横断して上総へ通じていた頃この三浦半島で最も勢力のあった一人の墳墓であるとして誤はあるまい。

(註) 1 「浦賀町沼田城山横穴について」赤星直忠(考古学雑誌第三十二巻第四号)

2 「古墳のはなし」尾崎喜左雄……勢多郡粕川村月田所在、切石と自然石とで構築の石室であり、切石の美しい敷石の床を持っているが出土品としては須恵器の長頸瓶と木片付小釘のみ出土し、羨道部から緑釉菊皿破片が出ており、これは既に仏教の影響ある頃のものと考えられており、群馬県総社町宝塔山古墳は切石積復室横穴式石室であり、これらは奈良時代初期のものと推定されている。

3 「組合式石棺を出した甘沼横穴群」赤星直忠(考古学雑誌第二九巻第八号、昭和一四)

4 逗子市山野根横穴群中、半月形奥壁を持つ様式で奥に造付石棺のあるものから須恵器高台付長頸瓶、坏を出土した。(鎌倉第四巻第三号第六一回史跡めぐり記録)横須賀市吉井横穴は家形横穴で須恵器高台付長頸瓶、平根式鉄鍬を出土した(「浦賀町吉井横穴」赤星「考古学雑誌第二四巻第五号」)

三浦市三崎町窪がり横穴群の一穴は半円形奥壁の末期横穴で、須恵器高台付坏、裏面に青海波文のない甕を出している。尚大磯町清水北横穴群は家形及半円形奥壁のある様式の末期横穴であるが、これらからは須恵器甕の断欠がそれぞれ出土し、その裏面に青海波文がない。

5 「逗子市山野根横穴群」県文化財報告書第二十一集、昭和二十九年

6 出土品や構造上、付近の末期横穴と同時代のものと考えられる。山腹を切って切石を組合せた横穴式石室を作り天井に一枚石をのせ、上に低く自立たぬ盛土をしたものである。